



国文祭・交流センターで講演する
田中優子・法政大学総長

傍聴席

仙北市議会を傍聴して

赤坂和仁

九月三日開幕の第5回仙北市議会定例会を傍聴し、仙北市の今後を占う重要な方向性について、清々とした門脇市長の報告から始まった。①統合庁舎の整備②国家戦略特区への申請③市立角館総合病院改築事業④少子高齢化問題⑤農業・観光・新産業の振興による地域活性化事業等山積した事案が挙げられたが、3町村の合併で成立した当市の抱える深い悩みが感じられた。

各地域の代表である市議会議員は議会制民主主義の最小単位であるが、民意を自分の信念に基づいて議決権を行使するといった重要な責務がある。

人口減が加速度的に進行していく、都市力が消滅する危機的な状況だからこそ過去の柵に捕われず、明るい未来の仙北市のために「義に懲りて膾を吹く」ではなく「火中の栗を拾う」強い意志と実行力をもって、若手議員を中心としたスピーディーで前向き且つ建設的な議会運営に期待したい。

開かれた市議会に、市民も是非参加してみてはいかがだろうか。

控室

私たちは合併した時点で、好むと好まざるとに関わらず、将来にわたって予測可能な事柄は無論、予測不能だった部分も含めて、様々な（課題と言う）大きな荷物を背負い込んだ。その荷物の中で最大のものは出来る限り、旧3ヶ町村の均衡ある発展を図ってゆく、と言うものだったはずだ。もちろんそれぞれの立ち位置や考え方によって視点は異なるものの、民意のその最大公約数は厳然として

存在する。一般の市当局の唐突な本庁舎の提案はもとより、これまでの新角館病院の位置など、都市計画としての市のシンボルとでも言うべき部分に対する市政が、はたして民意の最大公約数の近傍にあるものなかどうか、すでに取り返しのつかない部分もあるが、せめて今後の選択部分においてはパブリックコメント的な、形ありきで内容の伴わないやりかたではなしに、大命題として20年或いは30年後の後世の批判に耐えるべく、民意の総意を探りながら今一度、立ち止まって熟慮に熟慮を重ねるべき時ではないだろうか。

（阿部則比古記）



国文祭で大好評だった議会の振る舞い餅

編集後記

「発見×創造 もうひとつの秋田」をテーマに第29回国民文化祭が始まった。

仙北市では、多くの事業が行われるが、飾山囃子や「仙北地方のささら」郷土民謡・手踊り・番楽など民俗芸能の宝庫である。更に文化芸術に関しても、芥川賞・直木賞作家や秋田蘭画、佐竹北家の文化、武家屋敷、樺細工、白岩焼等すべてが誇りを持って全国へ発信できる素晴らしい素材である。この文化・芸術を再発見し、創造と伝統芸能を引き継ぐ若者を育てる絶好のチャンスでもある。全国から本市を訪れるたくさんの人々を温かく迎えていきたい。

さて、議会だよりも今号より構成や見出しを変え、用語解説も多くし、より見やすく、読みやすく、分かりやすい紙面に一歩近づけたかなと思います。「日に新たに、日々に新たなり」との言葉のように、毎号新鮮な気持ちで、市民の皆さんに、より親しまれる議会だよりになるように作り上げてまいります。

（熊谷一夫記）

用語解説

- ・あつものにこりてなますをふく
- …ある失敗に懲りて、必要以上に用心深くなり無意味な心配をすることのたとえ